

# ポスターセッションP I

10月16日（水）14：30～15：44／会議運営事務室

---

**座長** 社会福祉法人慈照会 グループホームふの慈照園 管理者 長岡 展生 氏

テーマ「地域拠点・地域連携・地域貢献・GHケア・  
認知症ケア・自己決定支援・重度化防止 等」

| 時間         | 演題 / 副題                                    | 所 属               | 発表者 (都道府県)     |
|------------|--------------------------------------------|-------------------|----------------|
| 14:30<br>} | 外部評価からの気付きと取り組み<br>～家族との絆・地域とのかかわり～        | グループホーム かがやきの園    | 近藤 睦子<br>(島根県) |
| 14:45<br>} | 家族様との繋がり                                   | グループホーム メイプルリーフ宇治 | 佐々木裕実<br>(京都府) |
| 15:00<br>} | 「しない」「させない」からの脱却<br>～グループホームとしての役割発揮を目指して～ | グループホーム さんとめ      | 小嶋 綾<br>(埼玉県)  |
| 15:15<br>} | 認知症高齢者の社会参加活動<br>0.5 アールの畑から共生社会を考える       | グループホームわしま        | 小林 久美<br>(新潟県) |
| 15:30<br>} | なんぞ私にできーことないかや?<br>思いに寄り添う生活支援             | 荒島ふれあいの郷 バルツガーデン  | 小室 里美<br>(島根県) |
| <b>総 評</b> |                                            |                   |                |

## 外部評価からの気づきと取り組み

## ◆キーワード

- 1 家族の思い
- 2 情報発信
- 3 地域とのつながり

～家族との絆・地域とのかかわり～

島根県・安来市

しゃかいふくしほうじんせんだんかい

社会福祉法人せんだん会

グループホーム

その

かがやきの園

発表者：管理者 近藤 睦子

共同研究者：高井彩・山根朱莉・森山高行

|                                               |                                                                  |
|-----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| 施設名 ケアポートやすぎ<br>併設 デイサービスセンターほほえみの園<br>定員 35名 | かがやきの園 理念<br>私らしく・貴方らしい生活の継続 豊かな心で・ゆつたりと、ありのままに生活のできるように私達は努めます。 |
|-----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|

## (取り組んだ課題・はじめに)

コロナ禍における施設生活では、長期の行動制限や制約を経験した。その中で、入居者はご家族やご親類と対面での面会の機会が減り、それを補うためにタブレット面会への切り替えを行った。

2023年度に実施したグループホーム外部評価では、年間4回の新聞発行やご家族来園時に入居者の日頃の様子を伝えていたにもかかわらず、情報発信の項目で評価が低いという結果が出たことで施設の課題が浮き彫りとなった。

その結果を踏まえ、入居者とご家族の視点を重視しながら、地域の中でコロナ禍からの環境の変化に対応した取り組みに良い結果が見られたので報告する。

## (倫理的配慮)

研究発表にあたり、関係者の同意を得ている。

## (具体的な取り組み) 期間2023年10月～現在

情報発信の改善について職員間で相談を重ね、入居者とご家族との新たなコミュニケーション方法や絆を深めるための取り組みを行った。さらには入居者のレクリエーション・個別支援活動にも工夫を施した。また外出活動や地域のイベント活動に参加し地域の方との繋がりを作った。

## 1. ご家族とカフェ参加

家族との交流を促進するために、入居者とご家族が会話や交流を楽しむ機会を設けた。

## 2. ミニ新聞と行事の写真送付

行事の写真を添えたミニ新聞を発行し、直筆の家族へのメッセージも添えてご家族に送付した。

## 3. 記録や1日の流れの業務改善

職員の業務改善を行い、記録業務を効率化することで、入居者と関わりを持つ時間を増やした。

## 4. 散歩に出かけた

定期的な散歩の取り組みを強化した。

5. オレンジフェスタ in やすぎ参加への取り組み  
地域イベント、オレンジガーデニングプロジェクトの作品作りに参加した。

## (活動の成果と評価)

1. 入居者とご家族が会話や交流を楽しむ機会ができた。職員も一緒に参加することで、家族の要望や気づきを直接伝えられる場となった。

2. 運営推進会議でご家族代表から「非常に感激した」とコメントがあり、情報発信の重要性と効果を実感した。

3. この時間を活用してデイサービスで行っていたドライブやレクリエーションを取り入れた結果、大変喜ばれ、より深い関わりを持つことができた。

4. 入居者の身体機能の維持や精神的なリフレッシュが図れた。さらに、散歩中に地域の方から声を掛けられる回数が増え、個別の交流に発展する様子も見受けられた。

5. ひまわりの花を折り紙で作成した。イベント参加への出品が楽しみとなり意欲的に取り組むことができた。

## (今後の課題・考察・まとめ)

今後は継続的な情報発信を行い入居者の日常をご家族に伝え続け、またご家族の声を積極的に取り入れる必要がある。また、入居者の興味や関心に応じた多様なレクリエーション活動を企画し、個々のニーズに対応することや、新しい活動やプログラムを取り入れることで、心身の活性化を図ることも重要である。

これら一連の取り組みはコロナ禍による社会生活の変容を受けた後のグループホームの外部評価によって、施設の課題が浮き彫りとなった事からである。課題の改善は、施設の入居者やその家族、地域社会などに対して、サービスの質を向上させるための取り組みを実行するという点で、信頼できる組織であることを示す重要な手段となり得る。

「オレンジフェスタ in やすぎ」への参加を契機として入居者が豊かな生活を送るための環境を整え、それを組織全体で連携し努力していくことが、地域社会の中で信頼される法人として歩んで行けるものと考えている。

(参考・文献など)

## ◆キーワード

- 1 リモート面会
- 2 コロナ禍
- 3 絆

京都府・宇治市

グループホーム <sup>うじ</sup>メイプルリーフ宇治発表者：ささき ひろみ  
佐々木 裕実共同研究者：松田好弘、井手千鶴、北谷幸奈、  
大西美紀、グエン・ティ・ミン・マン

株式会社ケアトラストが運営。  
平成14年6月伊勢田に開所。3ユニット定員24名。  
平成22年に横島に新社屋を開設・移転。

「自立」「開放」「前向き」「支え合い」の理念の下、  
ご利用者が安心して、家庭のようなごく普通の生活  
が送れる事を目指している。

## (取り組んだ課題・はじめに)

新型コロナウイルスが全国的にも流行し、当施設もご利用者に感染しないよう当初から面会中止が開始され4年になろうとしている。コロナが5類に移行し面会の緩和が始まり、久しぶりの対面面会で涙されるご利用者もおられた。5類移行前の面会方法はリモートを主としており、直接顔を合わせての面会は本当に喜ばれていた。その中でひとときご家族との繋がりを求められたN様の報告をする。

## (倫理的配慮)

今回の発表にあたり、写真に写っているご家族等に事例内容の承諾を得て、個人情報、秘密保持について配慮を行った。

## (具体的な取り組み)

対象者N様 男性97歳 要介護4 認知症。キーパーソン長男嫁様。次男様、孫様、姪御様が宇治市内に在住。併設の小規模多機能型居宅介護を利用された後、令和2年4月10日グループホームに夫婦で入居される。のちに奥様はご逝去されたがこのことはN様の精神的なダメージを考え、ご家族の意向もあり伝えていない。コロナ発生前は、頻りに面会などされていたが、新型コロナウイルス感染の増加に伴い、面会がリモートになりリモートでは面会がしばらく面会が殆どなくなり、そのことで生活意欲低下も見られるようになった。「寂しい」「お母ちゃんに会いたい」「面白いから寝る」など度々言われるようになり、週2回の訪問リハビリでも意欲低下により体力低下も現れるようになった。以前のように元気になって頂くために様々な支援を実施。状況をご家族にも報告し、協力を求めた。対面面会の再会を機に、家でよく食べていた好物(ビスケットやパン)をご家族が持参して下さったり、また定期的に手紙や写真を送って下さり、そのお手紙の返事を書くことでご家族との繋がりが再開した。そして大好きなドライブや散歩もOKとなり、よくお連れしリフレッシュして頂いた。住んでおられたマンションに立ち寄った際には昔話をして下さった。

体力・意欲低下がみられた訪問リハビリでは、スタッフさんにも細かな現状を都度お伝えし、ADLに合わせながら取り組んで下さった。また行事ごとに仮装姿でリハビリに来て下さり、N様を楽しませて下さった。

## (活動の成果と評価)

新型コロナウイルス感染対策を行いながらの頻回の面会では、住んでおられたマンションの話、ご家族の話、N様の体調の話、今度何が食べたいなどの話。「また来てや」など、N様にとって生きがいとなっていることを痛感した。「今度ドライブ行こうな」とこれからの楽しい計画の話もご家族とされていた。ご家族は「おじいさんには何でもしてあげたい。必要なものがあればいつでも言って下さい」と毎度言って下さり、N様との強い家族愛を感じた。このご家族とのつながりで得た活力が訪問リハビリにも影響し、「初めは心配していましたが、本当に頑張られていますよ」とスタッフより太鼓判を押して頂くまでになった。

## (今後の課題・考察・まとめ)

今回、N様にスポットを当てて発表したが日々の暮らしの中でN様だけでなく他のご利用者もご家族とのつながりを強く望んでおられると感じる。面会への規制を緩和したことで、定期的に面会に来て下さるご家族も増えたが、緩和してもほぼ面会に来られないご家族もおられる。ご家族に会わず生活をするというのはとても心細く寂しいだろうと想像できる。少しでもご家族とのつながりを持って頂く為に、敬老会開催時にご利用者へのお手紙を書いて頂くなどの支援を行っているがそれだけでは不十分だと思う。ご利用者の家族とも繋がりたいという希望を叶えるため今後もあらゆる方面からの支援を模索していきたい。又スタッフとの繋がりや利用者同士の繋がり、社会とのつながりでもご利用者の気持ちを豊かにすることは出来ると思う。様々な繋がりを大切にしながら何よりもご利用者が毎日安心して楽しく暮らせるように支援をしていきたい。

## 「しない」「させない」からの脱却

～グループホームとしての役割発揮を目指して～

## ◆キーワード

- 1 職員育成
- 2 認知症ケア
- 3 業務改善

埼玉県・所沢市

グループホーム さんとも

こじま あや  
発表者：小嶋 綾

ながいひろゆき いぐちゆか いしいさとみ おおたとしふみ  
共同研究者：永井宏幸 井口優香 石井里実 太田利史

2017年5月、所沢市に開設したグループホーム  
2ユニット並列型 定員18名 平均介護度2.6

利用者が大切にしてきたことや、これまでおこなってきた生活をグループホームでも継続して頂けるように日々工夫しながら、職場全体で支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

事業所が開設してから4年が経過した2021年当時、グループホームの管理者に着任した。その頃、利用者の平均介護度は3.2となっており、重症化が進んでいた。オープニングから入居している方々が年齢を重ねていたこともあり、自然な事象だと捉えていたが、それだけではない様子だった。「食事の準備が大変」「利用者に色々させるのは可哀想」等の言葉や、スピーチロックの声かけが聞かれていた。知識や技術の曖昧さ、間違った認知症ケアの理解をしている職員が交わすコミュニケーションの数々は、私の思い描くグループホームとは程遠いものだった。

グループホーム本来の役割や機能を発揮できる状態を取り戻したいという思いが沸々と沸き上がった。副主任や所長と協力して現場に提案し、職場全体で取り組んだ3年間の経過を報告する。

【現場で起きていた課題】

- ・職員同士での話し合いの場が少なく、介護観の共有が不十分である。
- ・職員の知識や技術が不十分で、ケアに対して自信がなく、互いに教え合う風土がみられない。
- ・認知症ケアの仕方が分からないため、間違った対応でBPSDが発生し、職員が利用者との関わりを諦めている。
- ・業務は職員がやるという固定概念から、利用者のできる事を職員が奪ってしまっている。

(倫理的配慮)

今回の研究発表に際し、写真掲載等、利用者、家族に説明し、承諾を得た。

(具体的な取り組み)

1. 年度初めの部会で、現場職員1人ひとりの介護観や1年後の目指す姿を語り合う時間を設けた。
2. 申し送りの時間が存在していなかったため、毎日、必ず朝会を実施するようにした。
3. 毎月の部会でミニ学習会を開催し、職員全体で学び続けられる場を設けた。
4. 利用者に関わる時間を増やす視点で現場業務の見直しを提案し、現場職員と議論したうえで実施した。

5. 利用者の動きを止めないことを現場で共有した。  
(活動の成果と評価)

1. 職員同士で語り合ったことで、それぞれの思いを知ることができた。これまで曖昧になっていた目指す姿や方向性が見える化され、部門全体で確認・共有することができた。
2. 申し送りノートも読まずに利用者ケアにあたる職員が減り、「聞いてない、知らない、関係ない」の解消につながった。日勤リーダーの裁量に一任されていた決め事も、職員同士で議論できるようになり、チームで働くことの意識づけに繋がった。
3. 学習会で得た知識が現場で活用されるようになった。日常のケアや業務の中で不安な事がある時には「学習会を開催して欲しい」と現場から声が上がり、職員の不安軽減につながった。
4. 間接業務で職員がフロアを離れた際に起きた利用者の転落事故をきっかけに、利用者にも目を向けるための業務改善について議論した。職員だけで作業する事をやめて、利用者と一緒に実施する考え方に徐々にシフトし、実際にできるようになった。
5. 利用者の動きに合わせ、否定せず、根気強く付き添ったり、出来る事を続けていくケアを日々伝えた結果、入院でADLが低下した方が歩行能力を取り戻したり、車椅子を卒業することができた。

(今後の課題・考察・まとめ)

職員の困りごとと利用者の困りごとを分けて考え、業務改善や学習会を根気強く実施したことで、徐々に職員の考え方が変化していった。「しない」「させない」介護から、「できるようになるには、どうしたら良いだろうか」という自立支援の視点に変わった。ADLの急激な低下や、認知症のBPSDが顕著に発生することが少なくなってきた。昨年、看取りや入居者の入れ替わりを経て平均介護度2.6と変化したが、それを維持できている。職員1人ひとりが認知症に関して正しい知識を持ち始め、ケアの実践に繋げることができるようになった嬉しい結果となった。

今後は更なる利用者のQOL向上にむけ、地域との関わりを増やし、施設内外で認知症ケアについての相互理解を深められるようにしていきたい。

## 認知症高齢者の社会参加活動

## ◆キーワード

- 1 社会参加活動
- 2 地域共生社会
- 3 農産物直売所

## 0.5 アールの畑から共生社会を考える

新潟県・長岡市

グループホームわしま

こばやし くみ

発表者：計画作成者 小林 久美

共同研究者： 職員一同

2015年4月、長岡市和島地域（旧和島村）に地域密着型特別養護老人ホームに併設し、2ユニット/定員18名で開設、現在は10年目

認知症ケアと社会的包摂を融合し「職場は地域、地域が職場」を掲げ、「ともに、生きていく」地域共生社会の実現を手の届く協働の中で求め続けています

(取り組んだ課題・はじめに)

私たちは昨年、社会交流活動として始めた「ともにつくる作品展（2020～）」、認知症ケアと職場のエンゲージメントを深めた「ともにつくるおこめ（2022～）」の取り組みを通して、ご利用者や職員という立場を超えて分け隔てなく一つの共同体として認識し合い、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）に繋がる「ともに、生きていく」共生社会の一端を体現できたのではないかと振り返った。それらは私たちを「認知症高齢者の社会参加活動」へと導き、共生社会の実現に向かうひとつの道筋となるであろうフィールドを「0.5アールの畑」に求めた。

今年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の理念を読み解き、今こそ共生社会の大切さを地元地域と分かち合い、私たちの“農”「0.5アールの畑」を通してご利用者の暮らしと地域の未来を探っていききたい。

(倫理的配慮)

演題発表にあたり、取り組みの趣旨や成果をご利用者、ご家族および関係者に説明し、了承を得た。

(具体的な取り組み)

施設を設計する際に「雨が降ってもご利用者が通える畑にしたい」と透水性のアスファルトに花壇型の菜園（6面）を整備し、年々増えていった菜園プランターと併せた総面積が50㎡=0.5アールである。この小さな畑を起点に認知症高齢者の社会参加活動「ともにつくるやさい（2023～）」に取り組んだ。

これまでも畑で育てた野菜を食事に活用していたが、せっかくなら地元の農産物直売所で販売してみてもどうかと地域の方からの提案を受けたことがきっかけとなった。地域の方と同じように出荷・販売することになるが、プロではないので不定期、不定量、不定形を前提に継続していくことを目標とした。

土作りはボランティアにも手伝っていただきながらご利用者と職員が行い、職員はご利用者と相談して作付計画を立てて苗や資材を購入し、苗植えや種蒔きはご利用者が主役となって行った。水やりや収穫は朝夕の涼しい時間に畑に通い、協力して行った。出荷する野菜は販売用に包装するが、入数や値段は

ご利用者と職員が相談して決めていく。袋詰めはご利用者が、出荷と回収・出納は職員がそれぞれ担い、販売した日は売れ行きの話で盛り上がった。

昨年は玉ねぎやじゃがいもなどを出荷したが、直売所では同時期に同じ野菜が並ぶため、夏野菜セットの企画やPOPのメッセージにも工夫を凝らした。（活動の成果と評価）

一連の工程においてはご利用者も職員も達成感を都度共有し、農産物直売所での出荷・販売を社会参加活動に結び付けたことで、いずれも暮らしや実践の場が地域に広がり有効な結果の一つとなった。

認知症への効果としては帰宅願望などのBPSDの軽減などが挙げられるが、その日に収穫した野菜を献立に活かしたり、畑の様子や買っていただいた野菜の話で食卓の会話が増え、共同生活という暮らしの場に「家族」という概念を呼び起こさせた。

(今後の課題・考察・まとめ)

これらの取り組みを通して見えてきたものは、“農”を通じた人と地域の身近な結びつきである。「お陰さま」「お互いさま」といった自然体のつながりはもとより、ご利用者は一人ひとりに、例えば認知症であってもなくても、同じ地域を分かち合う関係において、地域の人たちと同じようにありのままに暮らしていけることが認められていると感じた。

取り組んだ社会参加活動は地域において「社会的包摂」や「自己実現」を融合させ、未来においてはウェルビーイングな社会へと導いてくれるだろう。

私たちは今年、認知症地域支援推進員や保健師との連携とともに、地域の高齢者向け配食事業（社会福祉協議会）や地元小学校の学校給食、障害福祉サービスを実施する地元レストランへの食材提供などを提案し、手づくりの実践を進めている。

このような実践を認めてくれる地元・和島地域には心より感謝し、これからも共生社会という未来に向かう確かな歩みをともしていきたい。

(参考・文献など)

『人口減少社会のデザイン』東洋経済(2019)

『ネイバーフッドデザイン』英治出版(2022)

『農産物直売所で稼ぐ70の極意』家の光協会(2022)

## なんぞ私にできーことないかや？

## ◆キーワード

- 1 認知症と難聴
- 2 個別ケア
- 3 能力の活用

## 思いに寄り添う生活支援

島根県 安来市

社会福祉法人せんだん会

あらしまふれあいのさと

荒島ふれあいの郷 バルツガーデン

こむろ さとみ

発表者：介護支援専門員 小室 里美

たかた めぐみ たにもり えみこ

共同研究者：高田 めぐみ 谷森 恵美子

荒島ふれあいの郷3施設  
小規模多機能型居宅介護エスポワール定員29名  
地域密着型特定施設入居者生活介護ローズガーデン  
荒島定員20名

認知症対応型共同生活介護バルツガーデン2ユニット定員18名

(取り組んだ課題・はじめに)

2021年5月A氏は認知症の進行により独居生活が困難となり当施設に入居した。入居当初、新たな環境への戸惑いから、混乱し帰宅願望がみられた。更に、難聴があり、コミュニケーションが上手く図れないため、周りとの馴染めない様子で、被害的妄想や悲観的言動がみられた。

A氏にとって心地良い生活とは何か？話し合いを重ね試行錯誤しながら、生活支援をする中で、安心した表情が少しずつみられるようになったので、その過程を報告する。

対象者 A氏 女性 90歳 要介護3

認知症高齢者の日常生活自立度IV

障がい高齢者の日常生活自立度A2

病歴 アルツハイマー型認知症 難聴

研究期間 2021年～現在

現状と課題

- ①難聴があり、勘違いから他者とのトラブルやコミュニケーションが図れず孤立していた。コミュニケーション方法が統一されていない。
- ②帰宅願望から昼夜問わず出口を探して歩いている。思いを汲みとり、安心した生活が出来るにはどうしたら良いか。
- ③キーパーソンである息子は、認知症で変わってしまった母の姿を受け入れられず、厳しい言葉と態度で接していた。認知症の診断はあるが、治療はしていない現状。  
(倫理的配慮)  
発表にあたり、利用者及び家族に事例内容、写真の掲載について了承を得ている。  
(具体的な取り組み)
- ①視線を合わせ、ゆっくり話しかけるなど、コミュニケーション方法の統一をする。また、利用者間の会話の橋渡しをする。
- ②センター方式の「暮らしの情報」「心身の情報」を活用して、本人、家族への聞き取りを行い支援方法や本人の望む暮らしを考える。

- ③息子と看護師の付き添いで認知症専門医を受診する。

(活動の成果と評価)

- ①言葉の聞き間違いや勘違いもあったが、コミュニケーションが円滑になり交流が増えた。
- ②
  - I昔から慣れ親しんだ野菜作りは、やりがいに繋がった。
  - II畑を眺めて過ごせるくつろぎスペースを設け、居心地の良い場所ができた。
  - III趣味のカラオケや得意だった運動の経験を活かして身体を使ったレクリエーションを楽しんだ。
  - IV役割を持つ事で生活に張り合いと自信が持て継続した能力の活用に繋がった。
- ③認知症薬の服薬で、精神の安定と睡眠改善に繋がった。家族は受診に立ち合う事で、A氏の認知症について詳しく知るきっかけとなり、理解と協力をより得られるようになった。

(今後の課題・考察・まとめ)

これまで普通にできていたことや得意なことが、認知症や高齢になると思うようにできにくくなり「私なんかつまらんわ」と諦め嘆く高齢者は少なくない。環境に馴染めず、他者とのコミュニケーションも上手く図れず、孤立していたA氏に、チームで統一した個別ケアを行った結果、A氏から「なんぞ私にできーことないかや？」と、言葉が聞かれるようになった。その胸の内には、『役に立ちたい』『まだまだできる』という強い思いが感じ取れた。

今回の取り組みを通して、役割があることや生活を共にする一員と感じられる事が、自信や活力に繋がると改めて考えることができた。今後も一人ひとりの思いに寄り添った生活を支援していきたい。

(参考・文献など)

センター方式の使い方・活かし方

発行 認知症介護研究・研修東京センター